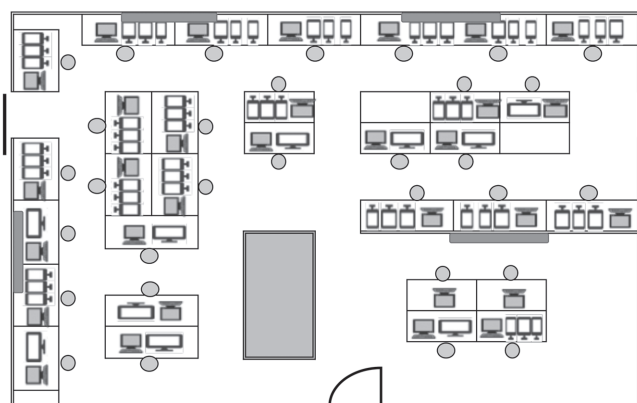


[第14回] 倉敷中央病院

小山 貴 倉敷中央病院 放射線診断科



大型液晶モニター

DATA

場所：病院1階
常勤医：22名
大型液晶モニター：4台
読影端末 (reporting system)：30台
PACS：32台
電子カルテシステム：32台
音声認識ソフト：10台

これが自慢!

当院は常勤医が22名と大所帯であり、初期研修医はそのほとんどが放射線診断科をローテートするので、月に2～3名の初期研修医がローテートしている。さらに日に1～2名の非常勤医師が来るので、多い日には最大で27名が、大きな読影室で読影に携わることになるのが1つの特質といえる。

読影の内容に関して、二次読影を行う上級医は、一次読影を行った後期研修医、修練医と頻繁にディスカッションする必要があるし、撮像のためのプロトコルやIVRの適応を相談する場合など、さまざまな状況で若手と上級医が会話をする必要がある。従って同じ読影室で仕事ができること、また読影室のなかで会話がしやすい状況にあるというのは大きな意義があると思われる。

筆者が当院に赴任した当初から比べ常勤医の数が増え、また初期研修医の放射線診断科をローテートする数が大幅に増加したので、工事を行い読影室を拡張した。

図1 複数の大型モニタが特徴の読影室



症例カンファレンス充実のための大型液晶モニタ増設

読影室が大きくなることでもう1つ問題となったのは、カンファレンスのための大型液晶モニタだった。週に一度は読影室で、病理診断部との間で、前の週に病理診断された症例から10例ほど選び、画像と病理を突き合わせるカンファレンスが行われる。このカンファレンスは、放射線診断医が読影した結果を確認するという意味においても重要な機会となっている。そのほかの日にも毎朝、研修医の教育を目的とした症例カンファレンスが行われるが、高精細モニタが一面のみでは、モニタから席が離れている者は画像をみるのが難しかったので、昨年末、4Kの高精細モニタを3台、新たに設置し、広い読影室のどこからでも画像や病理をみることができるようになった(図1)。

自宅での遠隔画像診断が可能なシステムの導入

女性医師が産休・育休などの前後に自宅から遠隔でカルテを閲覧し画像診断が行えるように、情報システム課の協力によりシステムを整備した。その後も子供が発熱などで急に病院を休む必要が生じたときでも、有給を取得することなく自宅で仕事をしていただくことが可能となった。昨今、急速に蔓延しつつある新型コロナウイルス感染に対して緊急事態宣言が発令されると、このシステムは当初はまったく予想しなかった形でわれわれの業務に変革をもたらすことになった。休校による育児のために出勤が難しくなった女性医師に加えて、特定警戒地域に自宅を有する4名の医師が自宅から遠隔画像診断をすることになったからである。Microsoftのアプリ「Teams」を併用して、若い医師と上級医の間では対話をしながら読影を進めるのみならず、日々のカンファレンスはこのアプリの会議システムを利用したテレカンファレンスとなった。

最後に、このような環境が実現するのは技術の進歩の賜物ではあるものの、一日でも早くこの読影室にすべての放射線科医がもどって仕事ができること、一日でも早く全国のコロナ感染が終息することを願ってやまない。



あなたの読影室、紹介してみませんか？

各施設において、読影環境を整えるためにさまざまな工夫がなされていることと思います。「配置」「空間」「照明」など、皆さまのこだわりをぜひご紹介ください！ご応募については下記までお問い合わせください。

clinimage@medicalview.co.jp

※掲載の可否につきましては、編集部にて判断させていただきます。あらかじめご了承ください。